

オープニング

2023年2月20日13時50分。東京都世田谷区成城。
高級住宅街の片隅にある阿望家の邸宅に、スーツを着た男達が雪崩れ込んだ。

黒岩 「一週間前に起きた阿望剛氏殺害事件についての逮捕状が出ている」

先頭に立つ男——黒岩鋼が被疑者の氏名が書かれた逮捕状を掲げる。
黒岩の鋭い眼光の先には、この事件の容疑者である4人が立っている。
殺された阿望剛の子供達。堇青、日長、翡翠、そして月長。

黒岩 「お前を逮捕する。阿望——」

堇青 「——やめておきなさい。神奈川県警としても、逮捕した直後に誤認逮捕だとわかるのは避けたいでしょう」

黒岩 「……そりゃあいったい、どういう意味だ？」

堇青 「そのままの意味です。私達家族の中に父を殺した犯人はいません」

黒岩 「そんなこと言われてもな。たとえ弁護士さんだろうが、証拠もなく逮捕を邪魔するってんなら公務執行妨害だぜ」

日長 「——いや、証拠ならもう見つけてある」

翡翠 「そうです。あなた達が来るまでに全員で考えたんです」

月長 「僕たちは、僕たちの潔白を証明できます」

いつの間にか、阿望家の4人を刑事たちがぐるりと取り囲んでいる。
ぱちぱち、と煽るような拍手をして、黒岩が一步踏み出してくる。

黒岩 「そりゃあ面白い。俺達が出した結論が間違っていると言いたい訳だ。
いいぜ、聞かせろよ。あんた達の推理ってのを」

容疑者の4人と同じく、あの日事件現場にいた刑事は嗜虐的に笑う。

黒岩 「ただし、くだらねえ戯言だったら、あんたら全員署まで来てもらうぜ」

ここに、あの日事件に出くわした5人ともが揃っている。
一週間前、この5人は美術館の展示会場にいた。
そして——嘆きのダイヤを呆然と見つめていたのだった。

2023年2月13日、神奈川県足柄下郡^{あしがらしもぐん}。

温泉地としても有名な箱根町^{はこねまち}にある美術館を貸切って、阿望工業の社長である阿望剛は宝石の展示会を開いていた。

展示会の目玉となる宝石は、嘆きのダイヤと呼ばれる稀少^{きしょう}なブルーダイヤモンド。しかしこのダイヤは、持ち主を死に誘^{いざな}うという曰^{いわ}く付きの宝石だった。

次のような逸話^{いつわ}がある。

18世紀、嘆きのダイヤの持ち主であったルイ16世は、かの有名なマリー・アントワネットと揃^{そろ}ってフランス革命で処刑された。その後、このダイヤを手に入れたフランス人ブローカーは発狂^{あげく}した挙句自殺。続いてダイヤを手に入れた宝石商は、強盗^{ざんさつ}にあって一家を惨殺される。この強盗団の一人、レヴェュー・カニトウスキーは列車の脱線事故で死亡。彼はダイヤが入ったトランクを抱え、まるで自分の身を犠牲にしてダイヤを守るように亡くなっていたという――。

展示会が既に終了した19時21分。

嘆きのダイヤが展示されていた本館のメインホールには、被害者とその4人の子供達、そして刑事が1人いるだけだった。

メインホールの唯一の出入り口であるセキュリティゲートには2人の警備員が配置され、事件当時の出入りは不可能。

そんな状況下で、時計の針が19時22分を指したとき、唐突に停電が起きた。

ホール内を闇^{おほ}が覆った直後、嘆きのダイヤが紅^{あか}く輝き始める。

「やめろ、やめてくれ」

何かに取り憑^つかれたように阿望剛が叫ぶ。

その少し後、あたりに轟音^{ごうおん}が響き渡った。巨大なものが床に叩き付けられる音。

気付けば、もはやその役目を終えたとも言えるように、嘆きのダイヤは光るのをやめていた。

しばらく経って館内に光が戻る。

そこで一同が目にしたのは、落下したシャンデリアの下敷きとなって事切^{ことき}れた、阿望剛の姿だった。

日長 「嘘^{うそ}だろ、親父……。なんかの冗談なんだろ？」

翡翠 「父さん……そんな。本当に死んでいるの？」

月長 「そんな、そんなことって……。どうして……」

堇青 「皆、落ち着いて。とにかく、落ち着きましょう……」

動揺する兄弟姉妹をよそに、刑事・黒岩鋼^{くろいわこう}は落ち着いて死体に近付いていく。

黒岩 「シャンデリアの落下は、^{さくい}作為的なものではないな。製品そのものが不良品だった可能性はあるが、事故で間違いない。となると——」

黒岩 「嘆きのダイヤが赤く輝いた。そして、時を同じくしてダイヤの持ち主が死んだ。これはただの事故か、それとも……」

不気味な沈黙が続く。その静寂に耐え切れなくなったように、誰かが呟いた。嘆きのダイヤは触れたものの魂を吸い殺す——やはり呪いはあったのだ、と。

黒岩が神奈川県警に、堇青が探偵の事務所に連絡を入れ、事件から10分ほど経った頃。ピ、とメインホールの出入り口から小^こ気味よい音が響いた。金属検知機^かを兼ねたセキュリティゲートの通過音だ。

ゲートから入ってきた探偵・犬^{いぬ}吠^{ぼう}埼^{ざき}瑠^る璃は、開口一番に黒岩に尋ねる。

犬吠埼 「大体の状況は堇青さんから教えていただきました。停電が起こり、その後にシャンデリアが落下して、下敷きになった阿望剛氏が亡くなったと。間違いありませんか？」

黒岩 「ああ、そうだ。正確には、停電が起き、嘆きのダイヤが真っ赤に光り、被害者はやめてくれと叫び、その後にシャンデリアの下敷きになった」

犬吠埼 「そうですか……。では、間違いないでしょう」

探偵は展示台の奥まで歩いていくと、振り返ってホールの全員を見渡した。

犬吠埼 「これは殺人事件です」

黒岩 「殺人事件だと？ シャンデリアの落下は事故なんだぞ？」

犬吠埼 「黒岩さんが言うならば、それはそうなのでしょう。けれどこれは殺人事件です。証明してみせましょうか？」

探偵は手帳型のケースに入ったスマートフォンを^{ふところ}懐から取り出すと、何かのアプリを起動した。そのまましばらく操作すると、全員に見えるようにスマホをかざし、画面をタップする。

その瞬間——メインホールが、事件を再現するように闇に包まれた。

停電が起きたのだ。

そして事件のときと同じく——十数秒の後、明かりが灯る。

堇青 「今のはどういうこと？ どういう手品で電気が消えた訳？」

犬吠埼 「手品と言うほどのものではありません。スマホから操作できるスマートデバイスを起動しただけです。コンセントに、起動するとショートして停電を引き起こす装置が取り付けられていました」

犬吠埼 「メインホールに来る前に、警備員の方に来て貰って一緒に確認しました。コンセント部分に最近焼き焦げた痕跡こ こんせきもあったので、事件のときに停電を引き起こしたのはこの装置に間違いありません」

月長 「ま、待ってください。そもそも、そんなものどうやって見つけたんですか？ 事件からそんなに時間も経っていないのに」

犬吠埼 「停電が起きたなら、調べるべきはブレーカーかコンセント。ブレーカーは明かりを点け直した時点で警備員の方が見ているはずですよ。尋ねてみたところ異常はなかったそうですから、残るのはコンセント」

犬吠埼 「ですが、何かしらの装置が使われたとすれば、金属検知機くぐを潜る必要のあるメインホールの中には持ち込めないでしょう。最終的に残るのは、本館にあるメインホール以外の普段使用されていないコンセント。ここまで絞り込めれば、探すのにさほど時間は掛かりませんでした」

日長 「誰かが意図的に停電を引き起こしたのはわかった。でもそれは事件とは関係なくて、嘆きのダイヤを盗むためだったって可能性はねえのか？」

犬吠埼 「もちろんその可能性も考えました。でも、嘆きのダイヤを盗むためにシャンデリアを落とす必要はないはずです。では『何者かが停電を起こしたタイミングで偶然シャンデリアが落下してきた』のでしょうか？ でも、これはいくらなんでも偶然が過ぎますよね」

犬吠埼 「結局、一番可能性が高いのは『何者かがシャンデリアが落下してくるタイミングを狙って停電を起こした』という仮説なんです。そしてシャンデリアの落下タイミングを狙った目的を、私は殺人以外に思い付きませんでした」

翡翠 「じゃあ……犬吠埼いぬぼうざきさんは犯人がどうやって父を殺したかわかっているんですか？ それに、犯人はこの中にいるんですか？」

その問いに対し、探偵は小さく首を横に振った。

犬吠埼 「ただ、一つだけわかっていることがあります」

はらり、と探偵の頬ほおから何かが零れ落ちる。

そして探偵・犬吠埼瑠璃は静かに——とても静かに告げた。

——彼を死に誘ったのはこの私です。

時は戻って——2023年2月20日、13時00分。

警察が突入する50分前、阿望家の邸宅で堇青はスマホを握りしめていた。

堇青 「それ本当？ そう……間違いないのね。わかったわ。じゃあ頼んでた件、手筈通りによろしくお願いね」

通話を切ると、堇青は目の前にいる3人を見つめる。

堇青 「私達の誰かに逮捕状が出たみたい。一時間もせずにここに警察が来るわ」

日長 「間違いねえのかよ」

堇青 「ええ、間違いないわ。仲良しの刑事に聞いたから」

堇青の言う仲良しとは、堇青に対して頭が上がらないという意味だ。情報源としてこれほど信用できるものはない。

堇青 「改めて確認させて——この中に、私達の誰かが父さんを殺したのだと思う人はいる？」

日長 「いねえよ」

翡翠 「いる訳ない」

月長 「うん。僕も……皆のことは信じてる」

堇青は頷いてスマホの^{ほりゆう}保留を解除する。
そして短く告げた。

堇青 「白石、やって」

それが計画開始の合図だった。

堇青は机の上に画用紙を広げる。阿望剛が殺された現場の見取り図だ。

堇青 「警察は信用できない。あいつらは20年前、母さんを誤認逮捕で死に追いやった。だからこの事件は私達で解決する。もう誰も死なせない」

もちろん、という風に3人も頷く。

堇青は見取り図の横にノートPCを置きながら言う。

堇青 「捜査を担当していた刑事達はほとんど出払ってる。私達を逮捕するためにね。だからその隙に、私の仲良しの刑事・白石が捜査本部に忍び込んで、ここに事件の証拠データを送ってくれる」

堇青 「私達に残された時間は50分。正直全然足りないけど、警察にある証拠品が手に入るタイミングは今しかなかったから仕方ないわ。この50分で、私達は私達の潔白を証明する」

堇青 「日長、あなたの元探偵としての力がある。警察の連中が青ざめるような推理をして頂戴」

日長 「おうよ、任せろ」

堇青 「翡翠、現場の展示会場の設備に一番詳しいのはあなた。気になることがあったらなんでも言って」

翡翠 「わかった」

堇青 「月長、父さんはあなたに一番目を掛けてた。一緒に父さんの無念を晴らしましょう」

月長 「うん……頑張るよ」

起動したノートPCが、ピロン、とメールの受信を告げる。

堇青 「証拠のデータが届いた。準備はいいわね？ 捜査開始よ！」

▽一部証拠品のロックが解除され、調査できるようになった。

▽捜査&議論（フェイズ1）を開始する。